

荒廃した世界を旅する旅人の物語

The Walker 旅路の果て

作・浜田

登場人物

旅人（40） 荒廃した世界を旅する旅人。

男（28） 行き倒れているところを旅人に助けられるが米を盗んで立ち去る。

○山奥の道 昼

険しい山道をリュックを背負った旅人が登っている。

○山奥の原っぱ 夜

焚き火をして米を炊いている。

炊き上がったご飯を食べる旅人。

食事の後、お茶を飲みながら残りの米の袋を数える。

○山を抜けた平坦な小道 昼

道の脇に男が倒れている。

旅人「大丈夫ですか？」

男の側に寄り体を揺する。

男「う、うーん」

旅人はリュックから水筒を取り出し水を飲ませる。

男「うーっ、助かった。危うく野垂れ死ぬところだったぜ。」

「あんた、これから何処へ向かうつもりだい？」

旅人「いや、特別これといった宛ては無いんだが住みやすそうな土地が見つかればそこで暮らすつもりだよ。」

男「旅は道連れ、世は情け、お互い宛てが無い旅なら二人でその土地とやらを探そうじゃないかい？」

○林の中の平坦な場所 夜

旅人は二人分の飯を炊き男に食事を振る舞う。

二人で飯を食いながら

男「しかし贅沢を言うわけじゃねえが肉が食いてえなあ」

旅人「ああ、もう肉なんて何年もお目にかかってないねえ」

旅人「ただどこの玄米ってのは地面に蒔けば芽が出るくらいの生命力がこの1粒の種に詰まっているんだ。それを食べているお陰でこんな世の中でもどうにかこうにか生き延びてこられたって訳さ。」

男「土地が見つかったら鶏を飼おう！豆とか米は鶏に食わせて俺たちは肉を食う。」

旅人「それは良い考えだ。卵も食えるしね。」

○テントの外 夜

男「おい、もう眠っちゃまったのか？」

旅人「グウグウ…」

旅人が眠った後、テントの外で男がガサゴソと何かを漁っている。

旅人のリュックから米の入った袋を取り出す。

1つ2つ3つ4つ5つ

男「ケツ、思ったより少ねえな。」

全ての袋をカバンに詰め終わると男はその場を立ち去る。

歩み出そうとするが脚を止めて、

男「悪く思ふなよ。こいつは世話になった礼だ。」

男はカバンから米の袋を1つ取り出し旅人のリュックに戻す。

○テントの外 翌朝

テントから出てきて

旅人「おはよう。そーいや、あんたの名前聞いて…あれ？」

リュックの中身が荒らされている事に気がつく。

旅人「朝飯作ってくれてるのかな？」

旅人「ち畜生、やられたあ〜」

旅人は米を盗まれた事に気がつく。

○川のほとり 昼

旅を続ける気力を無くした旅人はぼんやりとして川のほとりに腰掛けている。

旅人「腹減ったなあ〜この草食えるんだろうか？」

食べられそうな草を摘み鍋で茹でる。

旅人「ああ、米が一袋残っている。ありがたい。」

旅人は袋の米を半分使い野草のお粥を作る。

旅人「これ、結構イケるな。」

旅人「あー美味かった。」

ゲコツゲコツ 川の中からカエルの鳴き声が響く。

旅人「夜飯はカエルのフライだ！」

そう叫ぶと旅人は川の中に飛び込んだ。

○焚き火の前 テントの側 夜

フライパンでカエルの脚を炒めながら

旅人「香ばしいいい匂いだ。」

○焚き火の前 夜

竹で作った容器に米を入れようとして米をこぼす。

男「チツ、もったいない。こんな事なら鍋も盗ってくりや良かったな。」

竹の容器を焚き火の側に置き飯を炊く。

○険しい山道 昼

旅人が険しい崖を下る。

○平坦な道 昼

旅人は焚き火の跡を発見する。側には竹筒と箸が転がっている。

竹筒を拾い上げる旅人。ふと見ると地面に転げ落ちた玄米から芽が出ている事に気づく。

旅人「ここにしよう！」

○田園 秋

風に稲穂が揺れている。

○景色の良い丘の上

焚き火の上に飯盒がぶら下がっている。

飯盒の蓋を取ると中には炊きたてのご飯

ご飯から立ち上る湯気で画面が曇る。

END